

## 台灣人日本語學習者のフィラーの使用とその変化 —ストーリーテリング発話を中心に—

陳冠霖 / Chen, Kuan-lin

東吳大學日本語文學系 助理教授

Department of Japanese Language and Culture,

Soochow University, Assistant Professor

### 【摘要】

本研究將使用 I-JAS 語料庫來探討台灣日語學習者與日語母語話者在進行日語說故事課題時的填補詞使用傾向。本研究以產出頻率為主要分析依據，並考量發話時間和填補詞的產出種類進行分析，其主要結果可歸納如下。

- ① 學習者の日語能力越高，則越遠離母語話者の發話傾向。
- ② 母語話者の產出頻率比學習者高出許多。
- ③ 隨著日語能力的提高，延長型填補詞會減少，語彙型填補詞會增加。
- ④ 學習者間有著共通的發話傾向。填補詞的產出皆集中在「soshite」「ano」「a」「e」。
- ⑤ 母語話者の填補詞產出集中在「e」「etto」。

### 【關鍵詞】

台灣日語學習者、延長型填補詞、語彙型填補詞、產出頻率、說故事發話

**【Abstract】**

This study analyses the storytelling utterances of Taiwanese learners of Japanese and Native Japanese Speakers using the I-JAS corpus. We focused on the frequency of occurrence, considering the duration of speech and the filler produced. We obtained the following results.

- ① Learners' filler is more different with Native speakers as proficiency increases.
- ② Native speakers produce more filler than learners.
- ③ Extended filler increases, lexical filler increases as proficiency increases.
- ④ There is a common trend in the learners' fillers. Learners' filler is concentrated on "soshite" and "ano" and "a" and "e".
- ⑤ Native speakers' filler is concentrated on "e" and "etto".

**【Keywords】**

Taiwanese learners of Japanese, extended filler, lexical filler, frequency of occurrence, storytelling

## 1. はじめに

従来、フィラーは価値のない雑音として無視されてきた（定延 2010）。例えば、発話「えーと、田中です」が発話「田中です」と同一視されてきたということである。このように、命題内容を持たないフィラーは談話構造の中では「感動詞」とほぼ重なり、実質的内容が希薄で、生起位置が統語的に制限されないということとされてきた。日本語教育はもちろん、教科書でもフィラーを取り立てて取り扱う場面は見られない。

このような従来の否定的な考えに対して、キャンベル（2005）ではフィラーは実は話し言葉にとって本質的で、豊富な意味を備えていると述べている。定延（2010）では、「生起の義務性（フィラーを発したほうが良い場面）」と「不生起の義務性（フィラーを発しないほうが良い場面）」を取り上げてフィラーの重要性を例示している。（1）にその例を挙げる。

- (1) X: おはよう  
Y: a. おはよう  
b. うん、おはよう  
c. はい、おはよう  
d. あっ、おはよう

X と Y は互いに「おはよう」と挨拶し合える対等の間柄である。Y は「おはよう」と言われて「a. おはよう」と返すのは問題ない。しかし、「b. うん、おはよう」や「c. はい、おはよう」と返すのは一般的には失礼と感じられがちである。相手の挨拶を受ける時、肯定形のフィラー「うん」や「はい」を付けると発話が偉そうなものになりがちであり、上位者が下位者に対して返答するといった情景が浮かびやすい。一方で、「d. あっ、おはよう」と返した場合、フィラー「あ」は気づきと結びついているため、Y は X の存在に後になって気がついて返事した、という情景が浮かびやすい。

「こちらから先に挨拶をしなかったのはあなたの存在に気が付かなかっただけで、決して挨拶したくないわけではない」のようなニュアンスが感じ取れる。

このように、フィラーの観察は人間心内の認知行動の解明に役立つ。フィラーを付ける/付けない、あるいは付け間違いが発話全体に異なった意味を付与する場合がある。社会の中で常に他者と共存共栄しなければならない私達が、他者との関係を構築していく上で音声コミュニケーションが如何に重要かが見て取れる。定延（2004）が述べたように、特別な指導なしに放っておいても教室外で自然に日本語音声コミュニケーションのストラテジーを身につけられる学習者は一部にすぎず、そのストラテジーの理解も十分ではない。日本語教育の観点から見ると、日本語のフィラーも学習者にとっては外国語である。ほかの品詞と同じく学習なしにフィラーを自由に使いこなせるようにはならない。フィラー 1 つの誤用で聞き手に誤解を招き、不快感を与えることは容易である。実際に、日本語の発話の場面で自分の母語のフィラーを使ってしまったという事例もある（野田 2015、陳 2020b など）。

フィラーは日本語のコミュニケーションを円滑に進める上で必要不可欠な要素の 1 つといえる。フィラーは日本語のコミュニケーションで重要な役割を担っているが、日本語学習者にとってその習得は決して容易なものではない。語彙や文法の面でほとんど問題がない学習者が必ずしもフィラーがうまく使いこなせるとは限らない。会話を観察すると、フィラーが欠落したり、過剰使用したり、不適切なフィラーを使ったりする。日本語教育においてフィラーの重要性はすでに指摘されてはいるものの、それについての調査や研究は進んでいない。

そこで本研究は、授業内でも見られるストーリーテリング発話に着目し、初級/中級/上級学習者（各 10 名）のフィラーの生起頻度とその違いをレベル別に俯瞰する形で分析する。比較対象として日本語母語話者 50 名との違いを示す。日本語コミュニケーション能力の育成として、フィラーの使用を解明することは意義があることと考える。

## 2. 先行研究

### 2.1. 日本語のフィラー

フィラーという語は Brown（1977）で初めて使われたと言える。フィラーは主な統語構造とされない音声や語句とされており、「pause filler、

filler pause、filler」などと呼ばれていた。日本語のフィラーは「無意味語、感動詞、言いよどみ、間投詞、つなぎの語、遊び言葉、ヘジテーション (hesitation)、フィラー」などと呼ばれていた。現在ではフィラーに統一しつつある。しかし、フィラーには明確な定義がなく多くの先行研究は狭義的に「エート」「アノー」のような語をフィラーとしている。多くのフィラーは感動詞、指示詞、副詞からの転成で、もとの意味が薄れてなくなった。意味論的には全体の発話内容に影響しない語、統語構造的にも制限がなく発話中に現れやすい語とされている。

しかし、野村 (1996) では、フィラーは任意に発話中に現れるのではなく規則性にもとづいて出現すると指摘し、さらには発話の境界、転換、修正の機能を持つと述べている。定延・田窪 (1995) は認知言語学の観点からアプローチし、発話者はフィラーを使って聞き手との関係を調整していることを指摘した。田窪・金水 (1997) は感動詞を話し手の心的操作に関わるものとみなし、「エート」「アノー」の研究をおこなった。山根 (2002) は、発話・談話のタイプごとにフィラーの位置・種類と機能との関わりについてまとめている。

以上より、フィラーには統語構造的制限、独自の機能と役割、話者同士の関係の調整などの働きがあることが分かる。フィラーにはコミュニケーションにおいてそれなりの重要性があることについて述べたことに新しい視点が見られる。フィラーの役割についてはさらに深い考察が必要であると考えられる。

## 2.2. 日本語教育とフィラー

発話にかかわる言語処理モデルについて、Levelt (1989) は「概念化」「形成化」「調音」という 3 つのプロセスを挙げている。概念化の段階では preverbal message を処理し、発話の内容を企図するところである。形成化の段階は前段階で作られた内容を言語形式へと変換するプロセスである。その表象にもとづき、調音の段階で実際の構音運動がおこなわれる。

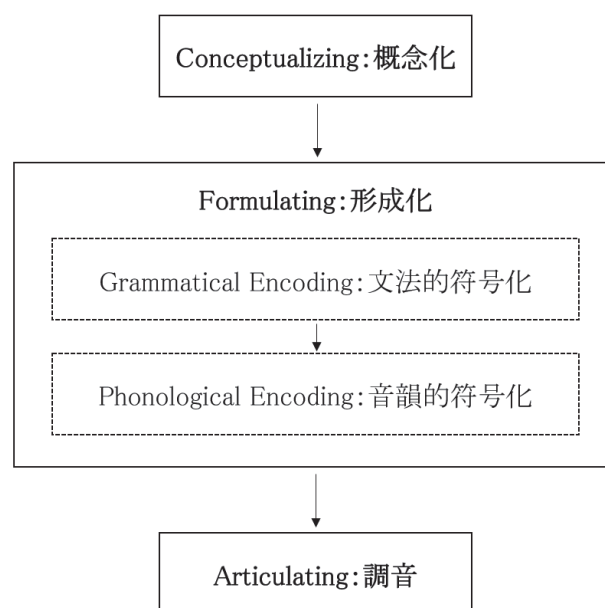


図 1：発話言語処理モデル（Levelt1989 を改変）

言語処理モデルにおいて、概念化と形成化は発話前の重要なプロセスとされている。山根（2002）は、第二言語学習者は母語話者よりもこのプロセスに費やす時間が多く必要としながらも、母語話者より問題が多く発生すると述べている。定延・田窪（1995）では、音声対話は情報データの受け渡しに様々な制限がかかるため、かなりの記憶容量や計算リソースを割り当てなければならない、文字対話より難しいと述べている。

上記から分かるように、発話には時間の制限というものが存在する。この発話の時間的制限に対して、母語話者は非流暢性の要素をうまく使い「時間伸ばし」をしている。例えば、つっかえ、伸ばし、繰り返し、言い直し、フィラーなどの要素を多用している（伝・渡辺 2009、定延 2019）。従来、周知的現象と位置づけられた非流暢性要素は音声コミュニケーションにとって必要不可欠な役割（思考時間の延長など）を担っている。一見雑音だと思われがちだが、人間の音声言語処理機構は非流暢性要素を自然

に「聞き流す」ようにできているため<sup>1</sup>、一般人には不快感は感じないはずである。それに反して、日本語教育では学習者は「きれい/流暢/丁寧すぎる」日本語を学んでいる。日本語教育では普段の会話に現れる非流暢な発話に重点を置いていないのが現状である<sup>2</sup>。その理由の 1 つとしては、教科書の編成方針として段階的に単語、文法、表現を使うということを前提にした上で、分かりやすく具体的な例文を添えることになっている。そのような制限があるため非流暢な要素は削ぎ落とさなければならない。そのため、教室内ではフィラーの学習や練習はなく、フィラーを有効的に会話の中に取り入れる学習者はあまり見られない。多くの学習者は卒業後、日本社会や日本語母語話者が多くいる環境に入ってから見よう見まねで学んでいる。

### 2.3. 学習者のフィラー

学習者のフィラーに関する先行研究として、日本語学習者のフィラーに関するものと、台湾人日本語学習者に焦点を当てたものの 2 つを概観する。

前者として、Philips (1998) は、学習者は習熟度が上がるにつれ使用頻度や使用種類が異なることを述べ、学習者に fillers の役割と使用を指導すべきだと結論づけている。宮永 (2009) では談話中におけるフィラー「アノ」の機能について学習者の習熟度とフィラーの使用に関連があると述べている。Iwasaki (2011) は日本留学の有無がフィラーの使用にどう関係するか調査し、留学後、フィラーの産出量は減るが種類は増すことを指摘している。

後者に関しては、江 (2003) と陳 (2018a, 2018b, 2020a, 2020b) では、学習者は自然発話において母語のフィラーを使用することがあると述べている。朱 (2014) と蔡 (2007) は同一場面において学習者と母語話者の

---

<sup>1</sup> またその逆も、存在しない音を補完するという「錯聴現象」もある。

<sup>2</sup> 「アノー」「エート」といった考えている最中や躊躇の機能を表す会話文はあるが、ただ例文として取り上げているだけで、フィラーを中心とした説明や自然発話の練習はないようである。これは、初級/中級/上級といった統合型教科書だけでなく、会話を中心とした教科書でも同様である。フィラーの「ナンカ」「ハイ」「デ」や終助詞の「～かしら」「～ぞ」「～ぜ」や若者言葉「～じゃん」「～だし」など、日常生活で実際に使用されている日本語と異なっている。

フィラーの使用回数、種類、発話機能に相違が認められたことを指摘した。習熟度別の分析について、李（2010）、朱（2014）、陳（2020a、2020b）は、日本語のレベルが高くなるにつれフィラーを使わなくなることを述べている。また、陳（2018a、2018b）では、発話音声のフィラーの数を調整した音声刺激を協力者に聞かせる自然性評価実験をおこなった結果、母語話者はフィラーがある発話音声をもっと自然だと評価したのに対し、学習者はフィラーが全くない音声刺激を自然だと答えた。このような実験から、学習者はフィラーの使用に否定的であることが明らかになった。陳（2020a）ではロールプレイ発話を、陳（2020b）ではストーリーテリング発話を分析し、いずれも学習者と母語話者のフィラーの使用傾向に相違が認められた。

以上より、学習者と母語話者の使用傾向に違いが見られ、日本語の習熟度と使用傾向に相関性があることが示唆された。学習者の習熟度とフィラーの使用、そしてタスク・場面別を考慮し大規模なデータを使用して考察する必要があると考えられる。

### 3. 調査の概要

#### 3.1. 使用するコーパスとタスクについて

本研究は、国立国語研究所「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」第4次までの音声データを使用した。I-JASには様々な母語の日本語学習者及び日本語母語話者を対象におこなった発話・作文の複数のタスクが含まれている。調査内容はストーリーテリング、対話、ロールプレイ、絵描写、ストーリーライティングの5つのタスクに加え、フェイスシートと日本語能力レベル判定テスト（SPOT<sup>3</sup>とJ-CAT<sup>4</sup>）がある。

本研究では、「ピクニック」というタイトルの5コマ漫画（図2）のストーリーを述べるストーリーテリングタスクを調査対象とした。最初にタイトル名と言い出し文を添えてイラストを見ながらストーリーを述べることとなっている。ストーリーテリングは一人の人間が話し手となって、ある一定の時間話し続ける「独話（モノローグ）」である。このタスクは、

<sup>3</sup> SPOT (Simple Performance-Oriented Test)

<sup>4</sup> J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)



イラストを手がかりに発話するため十分な発話量を引き出せるとされている。あらゆる教育現場でもストーリーテリングは導入されている。

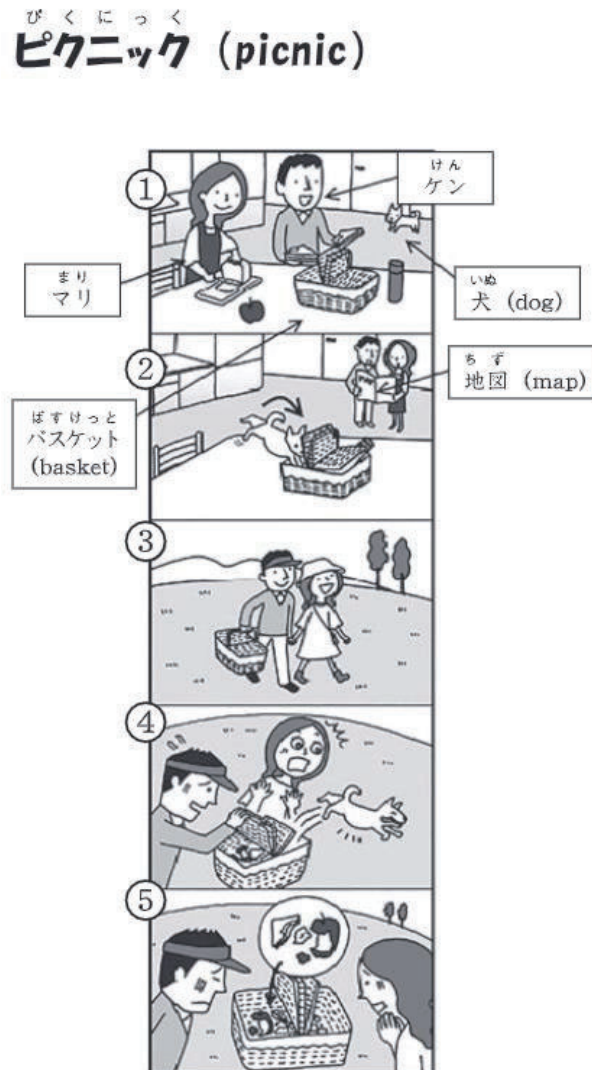


図 2:「ピクニック」のイラスト

### 3.2. 調査対象

調査対象は台湾人日本語学習者 (I-JAS の cct) と日本語母語話者 (I-JAS の jjj) である。台湾人日本語学習者は I-JAS 第 4 次までのデータに含まれる 50 名の中から SPOT と J-CAT の成績によって初級/中級/上級の 3

レベル各 10 名を選定した。日本語母語話者は 50 名を対象としている。母語話者は全て関東地方在住者で、日本語教育の経験はない。調査対象のフェイスシートと日本語能力レベル判定テストは I-JAS で公開されている。

### 3.3. フィラーの分類

フィラーの分類として、山根（2002）、須藤（2008）など、これまでのフィラー研究において共通してまとめあげられた分類を参考にした（表 1）。中国語母語話者がよく使う「呃/ə/」を中国語類として加えてある<sup>5</sup>。「エート」や「エトー」といった語中・語末の延長も考察対象とする。

あいまいな発音について、例えば、「アッエット」「アノーソノー」のような複数のフィラーが連続して生じる場合は、「アとエット」「アノーとソノー」に区切り 2 つのフィラーとして数える。「アーン」「エーン」は後部要素をとり「ン」として 1 つのフィラーとする。「ンット」「アット」も後部要素をとり「エット」として 1 つのフィラーとする。

表 1：調査語群と語

語群	含まれる語
1. 母音延長類	ア、イ、ウ、エ、オ
2. ン類	ン、ウン
3. エット類	エット、エート、エトー
4. コノ・ソノ・アノ類	コノ、ソノ、アノ
5. ハイ類	ハイ
6. ネ・ホラ類	ネ、ホラ
7. ナンカ類	ナンカ
8. つなぎ類	デ、ソシテ
9. マ・モ類	マ、モ
10. 中国語類	呃/ə/

<sup>5</sup> もう 1 つ中国語話者が多用する「嗯/ən/」のフィラーについては、「ン類」と区別が難しいため対象外とする。

### 3.4. 調査の方法

従来の研究手法はフィラーの語群の割合に着目しているが、本研究では発話時間と産出フィラーを考慮した生起頻度を中心に考察する。表 2 に割合のみに着目した場合に現れる問題を例示する。割合のみの場合、発話者 A と発話者 B の「エート」はともに 50%と同じ結果となっているが、生起頻度では発話者 A は 1 回/分、発話者 B は 4 回/分で違いが見えてくる。上記のような問題を排除するため、本研究では生起頻度を中心に、割合を副次的に考察する。また、生起頻度を用いることによって、調査対象の母数に相違があったとしても比較できると考えられる。

表 2：生起頻度と割合の例

	発話者 A	発話者 B
発話時間	1 分	30 秒
産出したフィラー	エート 1 回	エート 2 回
	アノー 1 回	アノー 2 回
エートの割合	50%	50%
エートの生起頻度	1 回/分	4 回/分

フィラーのタグ付けについては、I-JAS が公開している文字化文（視覚）と音声（聴覚）によって集計した。文字化文と音声異なる場合は実際の音声を元に文字化文に修正を施した。発話時間は音声波形表示をもとに 0.1 秒単位で測った。冒頭部分の言い出し文とタイトル名の発話時間は入っていない。

このようにしてフィラーの個数を秒で示した産出時間で割り、さらに 60 を掛けて、1 分間あたりのフィラー数をフィラーの生起頻度とした。本研究で用いたフィラーの生起頻度の指標を (2) に示す。なお、分析対象となるフィラー総数と総発話時間を表 3 にまとめた。

(2) 生起頻度：産出語数／産出時間（分）

表 3：分析対象のフィラー総数と総発話時間

調査対象種別	人数(人)	フィラー 総数(語)	総発話時間 (秒)
初級学習者	10	107	727
中級学習者	10	71	576
上級学習者	10	72	620
母語話者	50	371	2190

#### 4. 調査結果

##### 4.1. レベル別に見た語群の結果

各レベル間の比較には平均値を扱うことにする。初級/中級/上級学習者の産出結果を各グループに分けて表 4 にまとめた。表内の数値は(2)の方式で出した分単位のフィラーの生起頻度の平均値である。括弧内は使用フィラー総数に占める当該語の割合を示した。最下位部の数値はフィラー総数の生起頻度の平均値である。生起頻度は小数点第 2 位まで、割合は整数まで四捨五入で統一した。

表 4：レベル別に見た産出結果

語群	初級	中級	上級
母音延長類	1.24 (14%)	0.83 (11%)	1.06 (15%)
ア	0.17 ( 2%)	0.31 ( 4%)	0.19 ( 3%)
イ	－	－	－
ウ	－	－	0.19 ( 3%)
エ	1.07 (12%)	0.42 ( 6%)	0.68 (10%)
オ	－	0.10 ( 1%)	－
ン類	0.91 (10%)	1.04 (14%)	0.39 ( 6%)
エット類	0.74 ( 8%)	0.73 (10%)	1.16 (17%)
コソア類	1.24 (14%)	2.08 (28%)	1.16 (17%)
コノ	0.08 ( 1%)	－	－
ソノ	－	0.10 ( 1%)	－
アノ	1.16 (13%)	1.98 (27%)	1.16 (17%)
ハイ類	0.33 ( 4%)	－	0.19 ( 3%)
ネ・ホラ類	－	－	－
ナンカ類	－	－	0.39 ( 6%)
つなぎ類	2.48 (28%)	2.71 (37%)	2.51 (36%)
デ	0.58 ( 7%)	0.42 ( 6%)	0.19 ( 3%)
ソシテ	1.90 (21%)	2.29 (31%)	2.32 (33%)
マ・モ類	－	－	－
マ	－	－	－
モ	－	－	－
中国語類	1.90 (22%)	－	0.10 ( 1%)
計	8.83 (100%)	7.40 (100%)	6.96 (100%)

各レベルのフィラーの産出総数に関しては、初級/中級/上級の数値はそれぞれ 8.83 回/分、7.40 回/分、6.96 回/分で、レベルが上がるにつれフィラーの産出が減少していることが分かった。

産出フィラーの内訳について、「母音延長類」「ン類」「エット類」「コソア類」「つなぎ類」の産出が見られ、いずれも 10%以上となっている。

その中で「つなぎ類」は 30%を超えており、初級/中級/上級と通して「つなぎ類」を多用していることが分かった。一方で、「ハイ類」「ネ・ホラ類」「ナンカ類」「マ・モ類」の使用はほとんどない。「中国語類」に関しては、初級レベルでは多用していたが（22%）、レベルが上がるにつれほとんど産出しなくなった。

#### 4.2. レベル別に見た産出語の結果

レベルが上がるにつれて、産出された語にどのような違いがあるかを見てみる。表 5 はレベル別に産出されたフィラーを生起頻度が高い順にまとめたものである。ここでは、1 拍語のものを延長型フィラー、2 拍語以上のものを語彙型フィラーとする。語彙型フィラーには \* 印を付してある。

表 5：レベル別に見た産出語

順	初級	中級	上級
1	中国語呃/ə/ 1.90 (22%)	ソシテ *2.29 (31%)	ソシテ *2.32 (33%)
2	ソシテ *1.90 (21%)	アノ *1.98 (27%)	エット *1.16 (17%)
3	アノ *1.16 (13%)	ン 1.04 (14%)	アノ *1.16 (17%)
4	エ 1.07 (12%)	エット *0.73 (10%)	エ 0.68 (10%)
5	ン 0.91 (10%)	デ 0.42 ( 6%)	ン 0.39 ( 6%)
6	エット *0.74 ( 8%)	エ 0.42 ( 6%)	ナンカ *0.39 ( 6%)
7	デ 0.58 ( 7%)	ア 0.31 ( 4%)	ア 0.19 ( 3%)
8	ハイ *0.33 ( 4%)	オ 0.10 ( 1%)	ウ 0.19 ( 3%)
9	ア 0.17 ( 2%)	ソノ *0.10 ( 1%)	ハイ *0.19 ( 3%)
10	コノ *0.08 ( 1%)		デ 0.19 ( 3%)

産出語において、初級レベルでは中国語類「呃/ə/」の使用がもっとも高かったが、中級と上級レベルではほぼ見られないことが分かる。「ソシテ」と「アノ」は初級/中級/上級を通して常に上位を占めている。「エット」に関しては、使用頻度はそれほど増加していないが、使用順位は徐々に上がっていることが分かる。「エ」と「ン」はどのレベルでも中間に位置し、割合として 10%前後となっている。

#### 4.3. 母語話者の産出結果

母語話者を対象に集計した結果を平均したものを表 6 にまとめた。母語話者のフィラー総数の生起頻度は 10.17 回/分と非常に高いことが確認できた。

フィラーの語群に関して、母語話者は「母音延長類」と「エット類」を多用していることが分かる。生起頻度は「母音延長類」が 6.47 回/分(67%)、「エット類」が 2.03 回/分 (20%) と高い数値を出している。この 2 つの語群を合わせると 87%と全体的に高い割合を占めている。「つなぎ類」は三番目に多く使用される結果が得られた。

一方で、「ン類」「コソア類」「ネ・ホラ類」「ナンカ類」「マ・モ類」の産出は非常に低かった。

表 6：母語話者の産出結果

母語話者	
母音延長類	6.47 (67%)
ア	0.44 ( 4%)
イ	0.05 ( 1%)
ウ	—
エ	5.97 (59%)
オ	—
ン類	0.11 ( 1%)
エット類	2.03 (20%)
コソア類	0.05 ( 1%)
コノ	—
ソノ	0.03 ( 0%)
アノ	0.03 ( 0%)
ハイ類	0.30 ( 3%)
ネ・ホラ類	—
ナンカ類	—
つなぎ類	1.07 (11%)
デ	0.71 ( 7%)
ソシテ	0.36 ( 4%)
マ・モ類	0.14 ( 1%)
マ	0.14 ( 1%)
モ	—
中国語類	—
計	10.17 (100%)

表 7 は母語話者の産出語をまとめたものである。1 拍語のものを延長型フィラー、2 拍語以上のものを語彙型フィラーとし、語彙型フィラーには \* 印を付した。

母語話者の産出語に関して、「エ」は非常に高い割合を占めていることが分かる。約 10 秒に 1 回の頻度で「エ」が使われており、全体の約六割を



占めている。二番目に多いのは「エット」で約 30 秒に 1 回の頻度で産出されており、全体の約二割を占めている。結果として、母語話者については、ストーリーテリング発話において「エット」と「エ」を多用していることが示唆された。

表 7：母語話者の産出語

順	母語話者
1	エ 5.97 (59%)
2	エット *2.03 (20%)
3	デ 0.71 ( 7%)
4	ア 0.44 ( 4%)
5	ソシテ *0.36 ( 4%)
6	ハイ *0.30 ( 3%)
7	マ 0.14 ( 1%)
8	ン 0.11 ( 1%)
9	イ 0.05 ( 1%)
10	アノ *0.03 ( 0%)
11	ソノ *0.03 ( 0%)

## 5. 考察

### 5.1. レベル別に見た語群の違い

表 4 の調査結果より、初級/中級/上級の数値はそれぞれ 8.83 回/分、7.40 回/分、6.96 回/分で、レベルが上がるにつれフィラーの産出が全体的に減少することが確認された。これは、学習者は習熟度が上がるにつれ使用頻度や使用種類が異なること (Philips1998)、日本語のレベルが高くなるにつれフィラーを使わなくなること (李 2010、朱 2014、陳 2020a、2020b) と同様の結果が得られた。また、学習者はフィラーを使用することに対して否定的であること (陳 2018a、2018b) と合わせて考えると、学習者はフィラーの使用に対する否定的な心理は初級/中級/上級を通して変わらず、日本語のレベルが上がるにつれフィラーの使用を減らそうと試みていることが顕になったと言える。

産出された語群に関しては、中国語類を除いて各レベル間で大きな違いは見られなかった。レベルが上がることにより使用するフィラーの語群が増えたり、偏ったりすることはないことが示唆された。

以上をまとめると、学習者のフィラーの産出の特徴として、使用するフィラーの種類はレベルによって変化しないこと、そして使用頻度はレベルが上がるにつれて全体的に減少している傾向があることが分かった。

## 5.2. レベル別に見た産出語の変化

江（2003）と陳（2018a、2018b、2020a、2020b）では、学習者は自然発話において母語のフィラーを使用すると指摘している。本研究でもストーリーテリング発話において中国語の「呃/ə/」を使用する結果を得たが、表 5 の調査結果から分かるように初級レベルでは中国語類「呃/ə/」の使用がもっとも高く、中級と上級レベルではほぼ見られない結果となった。フィラーは無意識のうちに発せられることが多いため、レベルが上がるにつれ「日本語で発話しなければならない」という意識が高まり中国語の発話を制限した可能性を示唆している。しかし、タスク（ストーリーテリング発話、ロールプレイ発話、インタビュー発話など）による違いや場面の違いはどうか、今後の課題として精査したい。

産出された語について、上位を占めているのは「ソシテ」と「アノ」である。「ソシテ」は初級/中級/上級を通して 1.90 回/分（21%）、2.29 回/分（31%）、2.32 回/分（33%）で、「アノ」も 1.16 回/分（13%）、1.98 回/分（27%）、1.16 回/分（17%）と、高い産出であることが分かった。反対に、「ネ」「ホラ」「マ」「モ」「ハイ<sup>6</sup>」「ナンカ」は低い産出となっている。

「ソシテ」「アノ」「エ」は、台湾で使われている日本語の教科書で初期から頻出しており、比較的によく見られる語だと思われる。一方で、「ネ」「ホラ」「マ」「モ」「ハイ」「ナンカ」はフォーマルではない話し言葉であるためか、教科書ではあまり見られない。ここでは、学習者が使用す

<sup>6</sup> ここではフィラーとしての「自己肯定」機能を指している。

るフィラーと教科書に載っている語彙には何らかの関連性があると仮定するが、さらなる今後の検証が必要と思われる。

次に、産出語の変化について考察する。図 3 は産出語を語彙型フィラーと延長型フィラーに分け、それぞれレベル別にその変化を示したものである。縦軸は生起頻度を表し、語彙型フィラーを実線、延長型フィラーを点線で表している。1 拍語のものを延長型フィラー、2 拍語以上のものを語彙型フィラーとした。図 3 から分かるように、レベルが上がるにつれて語彙型フィラーは徐々に増加し、延長型フィラーは減少している。

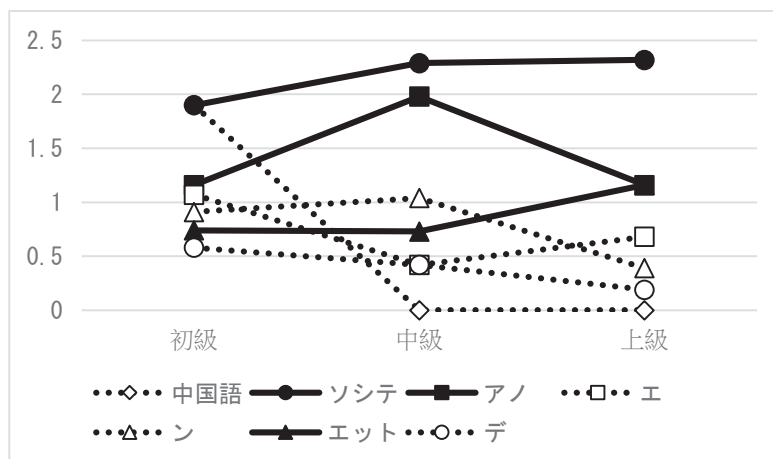


図 3：レベル別に見た産出語の変化

図 4 は産出語を延長型と語彙型の二つに分けて全体の生起頻度をまとめたものである。図 4 から分かるように、延長型はレベルが上がるにつれて 4.63 回/分、2.29 回/分、1.64 回/分と生起頻度が減少している。反対に、語彙型の生起頻度は 4.21 回/分、5.10 回/分、5.22 回/分と増加していることが分かる。増加/減少幅を見ると、延長型は大幅に減少し、語彙型は徐々に増加していることが観察される。

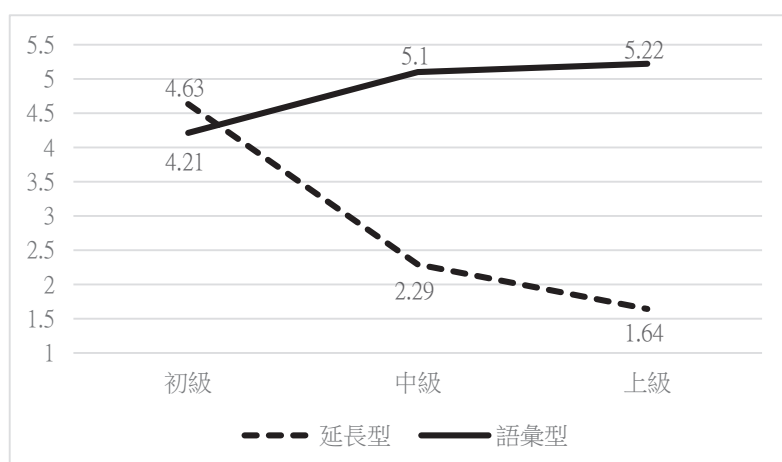


図 4：レベル別に見た延長型と語彙型の変化

以上より、学習者はレベルが上がるにつれて語彙型フィラーが増加し、延長型フィラーが減少すること、そして延長型フィラーである中国語の「呃/ə/」の使用も使われなくなっていくことが示唆された。日本語のレベルが上がることによって、延長型フィラーよりも語彙型フィラーのほうが「フィラーらしくない」ので使っても良いという学習者の心理が推敲できる。これは学習者はフィラーを使用することに対して否定的であること（陳 2018a、2018b）を反映した結果であることが示唆できる。

### 5.3. 母語話者との違い

表 6 と表 4 より、母語話者のフィラー総数の生起頻度は 10.17 回/分で学習者より高いことが確認できた（初級/中級/上級の数値は 8.83 回/分、7.40 回/分、6.96 回/分）。陳（2018a）、陳（2018b）が指摘したように、母語話者はフィラーの使用に対して否定的な心理がないこと、反対に学習者はフィラーの使用に対して否定的な心理が働いていることが本研究で改めて確認された。

母語話者が産出した語群について、「エ」と「エット」を多用していることが分かった。生起頻度から、「エ」は 6.47 回/分（67%）、「エット」は 2.03 回/分（20%）と非常に高い産出を出している。割合についても 2 つの語群を合わせて 87%と全体的に高い割合を占めている。それに対して、

表 5 の学習者の産出語の結果から「エ」の使用はそれほど高くないことが分かる。「エ」の生起頻度は約 1 回/分で割合は 10%程度である。学習者は「ソシテ」(21~33%)、「アノ」(13~27%)が上位を占めており、母語話者と異なる発話傾向を見せている。ちなみに、学習者の発話では上位を占めていた「ソシテ」と「アノ」については、母語話者はあまり使用しない。

図 5 は学習者と母語話者のフィラー総数の生起頻度をまとめたものである。学習者はレベルが上がるにつれフィラーの産出が減少していく傾向が伺える。それに対して、母語話者はフィラーを制限せず、1 分間に約 10 回以上の産出が観察される。レベルが上がるにつれて学習者と母語話者のフィラーの生起頻度の差が大きくなっていくことが示唆された。

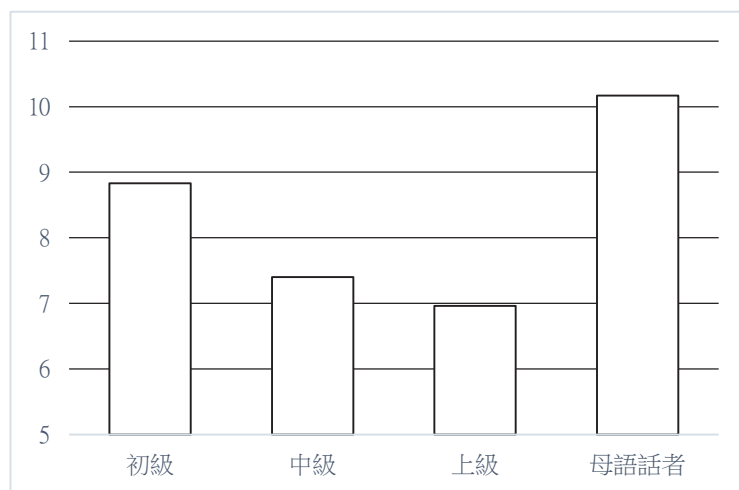


図 5：学習者と母語話者の生起頻度

表 8 は産出語を延長型と語彙型に分けて生起頻度をまとめたものである。図 4 の学習者の結果と統合して新たに作成した。繰り返しになるが、学習者はレベルが上がるにつれて延長型の生起頻度は大幅に減少し、語彙型の生起頻度は徐々に増加していることが分かった。それに対して、母語話者の産出語は延長型に集中している結果となった。レベルが上がるにつれて

学習者と母語話者の延長型フィラーと語彙型フィラーの使用比率の差が大きくなっていくことが示唆された。

表 8：学習者と母語話者の延長型と語彙型の推移

	初級	中級	上級	母語話者
延長型	4.63	2.29	1.64	7.42
語彙型	4.21	5.10	5.22	2.75

数値は生起頻度を表す

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、学習者のストーリーテリング発話におけるフィラーの使用を生起頻度と習熟度別の変化に着目し分析した。結果を以下の 5 点にまとめる。

- ① レベルが上がるにつれて学習者と母語話者の発話形式の差が大きくなっていく。
- ② 母語話者は学習者よりもフィラーを多く産出している。
- ③ レベルが上がるにつれて延長型フィラーは減少し、語彙型フィラーは増加する。
- ④ 学習者は異なるレベルにおいても共通する発話傾向がある。「ソシテ」「アノ」「ア」「エ」に集中している。
- ⑤ 母語話者のフィラーは「エ」「エット」に集中している。

本研究では、学習者と母語話者のフィラーの使用の全体像を把握しようと試みた。大まかな結果として、日本語のレベルが上がるにつれて学習者と母語話者の発話形式の差が大きくなっていくことについては注意されたい。

今後の課題として、以下の 2 点が挙げられる。(1) 日本語教育や日本語コミュニケーション教育に応用するためにも、学習者個々の発話の分析は不可欠だと考える。フィラーは談話の中にあるからこそ機能される表現なので、談話全体に視野を広げて、ディスコースマーカー、発話行為の分析、

語用論的分析といったアプローチを試みたい。量的分析から質的分析、最終的には日本語教育に活用したい。(2) 本研究では I-JAS 第 4 次までのデータを使用した。2020 年 3 月に第 5 次のデータが公開された。台湾人日本語学習者はもとの 50 名に加え、さらに 50 名追加し計 100 名という膨大なデータになっている。今後はさらに調査対象を増やし、統計的処理をおこなう予定である。

#### 付記

本稿は、2020 年 11 月 28 日「台湾日語教育研究国際シンポジウム：クリエイティブ・ラーニングを目指す日本語教育（淡江大学）」で口頭発表した内容を大幅に加筆・修正したものである。本研究の成果は 108 年度科技部專題研究計畫「台灣日語學習者的填補詞使用之研究(MOST 108-2410-H-031-081)」による研究成果の一部である。また、匿名の査読者による有益な論評に感謝する。

## 参考文献

- キャンベル, ニック (2005) 「日常生活における気持ちの伝え方」 林博司・定延利之 (2010) 『コミュニケーションどうする? どうなる?』 ひつじ書房
- 江秀姿 (2003) 『中・上級日本語学習者の会話分析—淡交二技の学習者の実例を中心に—』 東呉大学日本語学科修士学位論文
- 小西円 (2018) 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」 『国立国語研究所論集』 15, pp. 91-105, 国立国語研究所
- 蔡嘉綾 (2007) 「日本語学習者の会話におけるフィラーの研究—中国語母語話者を中心に—」 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 2, pp. 311-314, 東北大学高等教育開発推進センター
- 定延利之 (2004) 「音声コミュニケーション教育の必要性と障害」 『日本語教育』 123, pp. 1-16, 日本語教育学会
- 定延利之 (2010) 「会話においてフィラーを発するということ」 『音声研究』 14(3), pp. 27-39, 日本音声学会
- 定延利之 (2019) 「一般の日本語母語話者の発話はどのように流ちょうでないか?」 台湾・東呉大学公開講演配布資料
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(一)」—」 『言語研究』 108, pp. 74-93, 日本言語学会
- 須藤潤 (2008) 『音声的特徴から見た日本語感動詞の機能』 大阪大学言語社会研究科博士学位論文
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 pp. 257-279, くろしお出版
- 大工原勇人 (2010) 『日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究—フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて—』 神戸大学国際文化学研究科博士学位論文
- 陳冠霖 (2018a) 「日本語学習者が自然だと感じる日本語音声の特徴—発話速度、ポーズ、フィラーを中心に—」 日本語日本文化教育研究会第 31 回研究発表会



- 陳冠霖(2018b)「台湾人日本語学習者と日本語母語話者による聴覚自然性評価の差異—フィラー、ポーズ、発話速度を加工した合成音声を利用して—」『台湾輔仁大学日本語文学科創立 50 周年・台湾日本語文学会創立 30 周年記念国際シンポジウム予稿集』 pp. 297-304
- 陳冠霖(2020a)「台湾人日本語学習者のロールプレイ会話におけるフィラーの生起頻度について」『第 29 回小出記念日本語教育研究会予稿集』 pp. 32-33
- 陳冠霖(2020b)「台湾人日本語学習者におけるストーリーテリング発話の不自然なフィラーの使用」『台湾日語教育研究国際シンポジウム—クリエイティブ・ラーニングを目指す日本語教育—予稿集』 pp. 176-183
- 陳冠霖(2020c)「日本語母語話者における場面別のフィラーの使用傾向—ロールプレイ会話とストーリーテリング発話の違いに着目して—」『台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウム—日本語文学研究の境界線—予稿集』 pp. 35-42
- 伝康晴・渡辺美知子(2009)「音声コミュニケーションにおける非流暢性の機能」『音声研究』 13(1), pp. 53-64, 日本音声学会
- 野田尚史(2015)「日本語非母語話者の感動詞の不自然な運用」友定憲治(編)『感動詞の言語学』 pp. 149-165, ひつじ書房
- 野村美穂子(1996)「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—「フィラー」に注目して—」『教育研究所紀要』 5, pp. 91-99, 文教大学教育研究所
- 宮永愛子(2009)「会話におけるフィラー「あの」の使用文脈—日本語母語話者と日本語学習者を比較して—」『広島大学日本語教育研究』 19, pp. 39-46, 広島大学人間社会科学研究科
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- 李佳穎(2010)「台湾人学習者のフィラーの縦断的習得状況についての考察—Larp at SCU コーパスを中心に—」東吳大学日本語学科修士学位論文
- 朱立人(2014)『日語學習者在 OPI 中使用 Filler 之研究』輔仁大學日本語文學研究所碩士論文
- Brown, Gillian(1977)*Listening to spoken English*. Essex: Longman.

- Iwasaki, Noriko(2011)“Filling social space with fillers: gains in social dimension after studying abroad.” *Japanese Language and Literature*, 45, pp.169-193.
- Levelt, W. J. M.(1989)*Speaking: from intention to articulation*. Cambridge: The MIT Press.
- Philips, M. K.(1998)*Discourse markers in Japanese : connectives, fillers, and interactional particles*. Doctoral dissertation, Michigan State University.

本論文於 2021 年 5 月 4 日到稿，2021 年 6 月 17 日通過審查。